



Tokachi mountain range 2008年版 **十勝岳連峰登山案内**



大雪山国立公園の南部に位置している十勝岳連峰は、十勝岳を主峰にして美しい連なりを形成しています。上富良野町の十勝岳温泉と吹上温泉の登山口のほか、美瑛町の白金温泉と富良野市の布礼別ニングルの森にも登山口があります。

この案内は上富良野町からの登山口を中心とした利用についてのガイドブックです。正しいルールとマナーに従って楽しい登山やハイキングにしましょう！



発 行：上富良野町役場産業振興課商工観光班

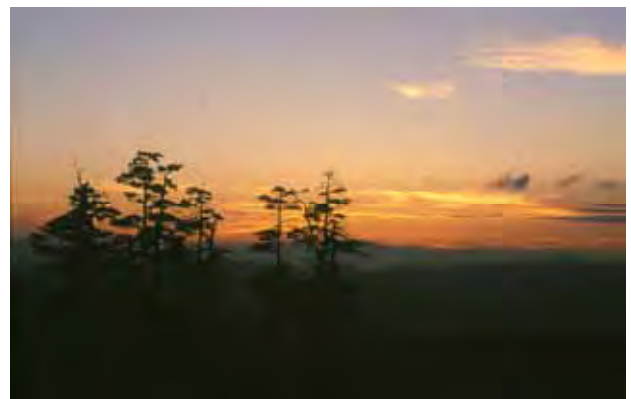
目 次

- ◆総合問合せ先
- ◇登山コース概念図 [十勝岳連峰]
- ◆走路横断概要図 [行程図・標高表示]
- ◇十勝岳温泉周辺案内図
- ◆吹上温泉周辺案内図
- ◇一般的注意事項



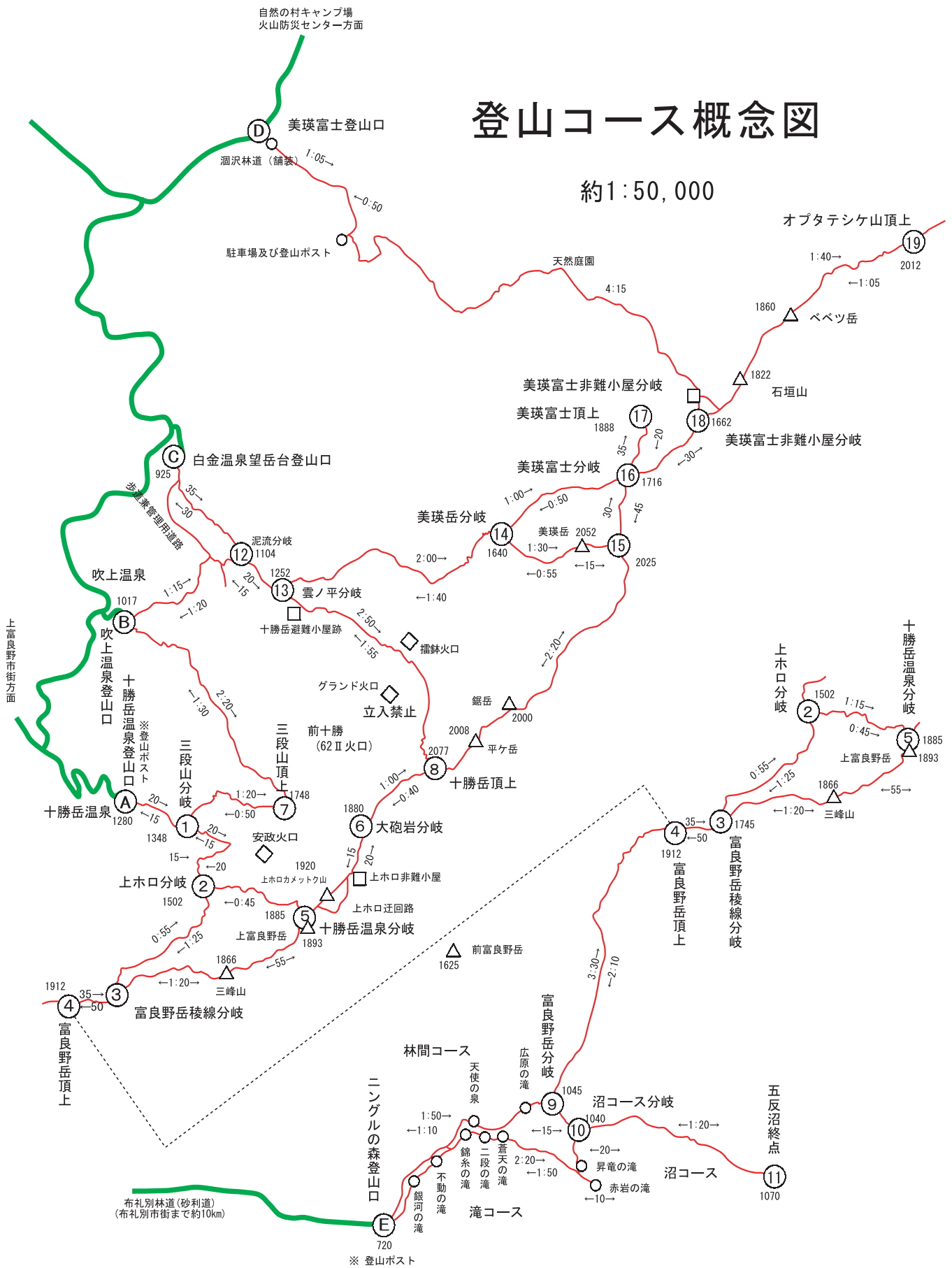
- ◆安全登山のための準備
- ◇最寄の野営場及び非難小屋・野営指定地
- ◆緊急対策機関・連絡先 [警察・病院等]
- ◇登山口案内 [駐車場・宿・周辺の概要]
- ◆登山道分岐・節点の案内

- ◇コースの概要 [低点から高点の登り順路]
- ◆エキノコックス症とは
- ◇十勝岳連峰の高山植物



登山コース概念図

約1:50,000

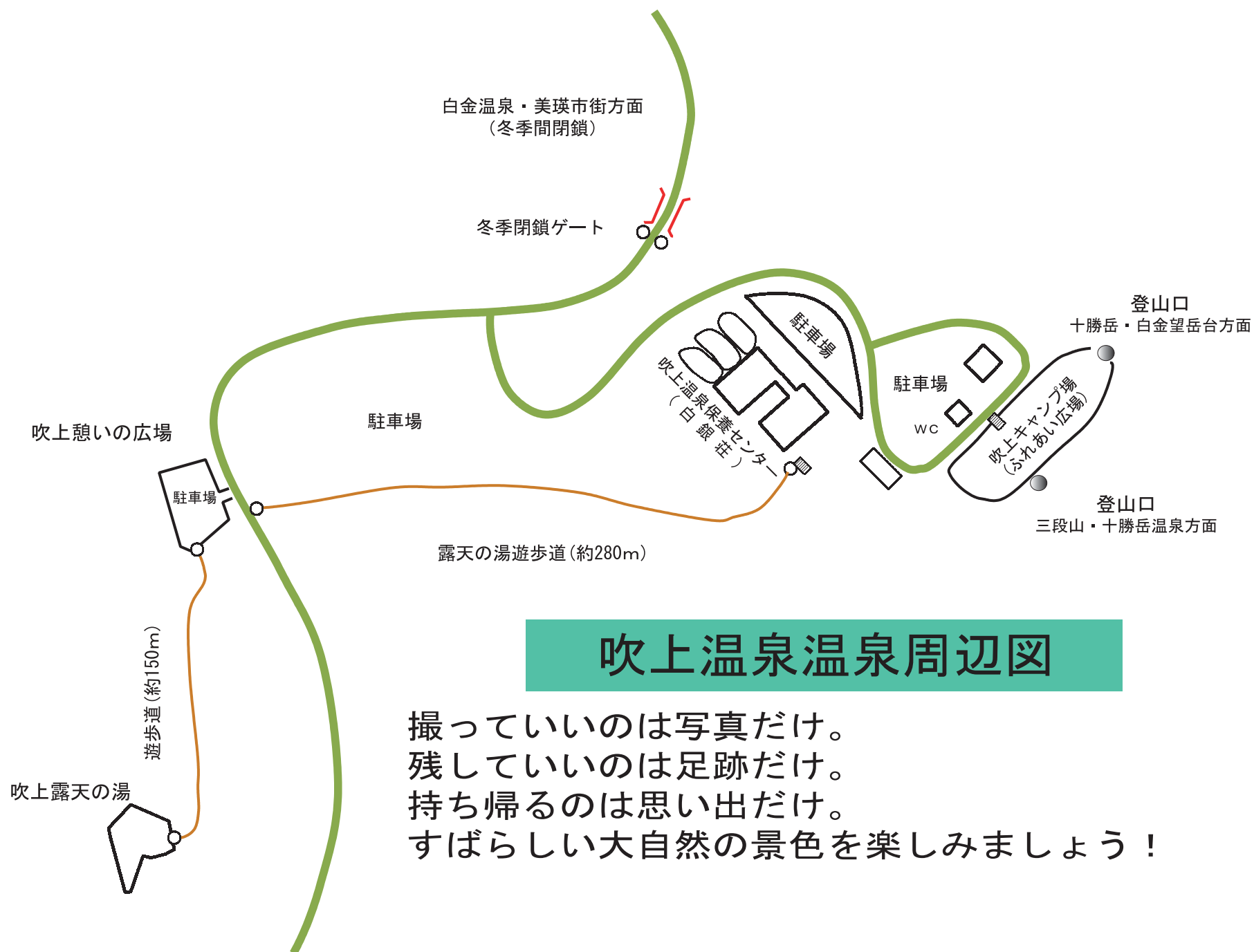


十勝岳温泉周辺図



登山道・遊歩道はハイヒールやサンダル
では歩けません。
運動靴等をご使用ください。

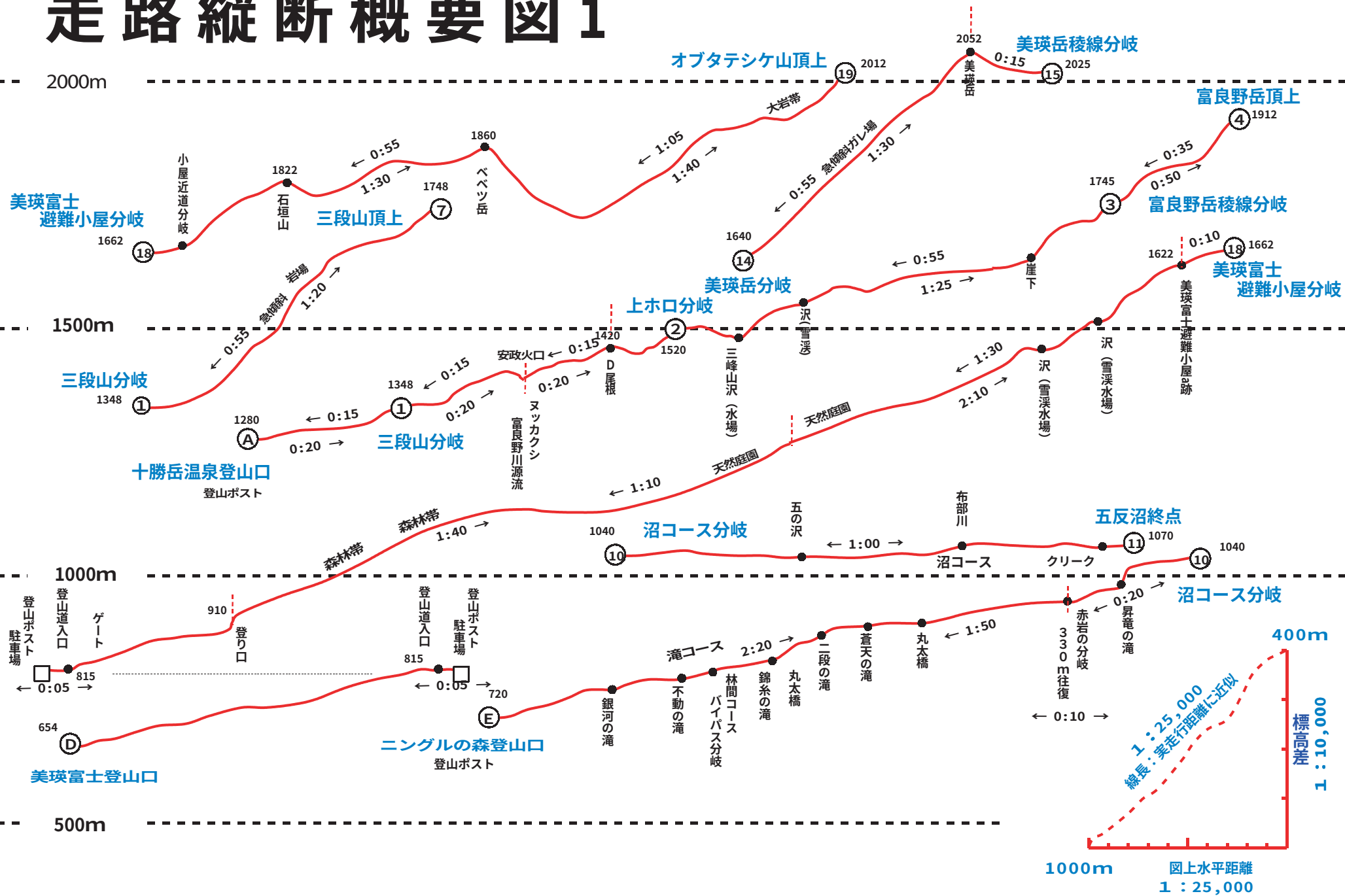
とってもいいのは写真だけ。
残していいのは足跡だけ。
持ち帰るのは思い出だけ。
すばらしい自然と景色を
十分にお楽しみください。



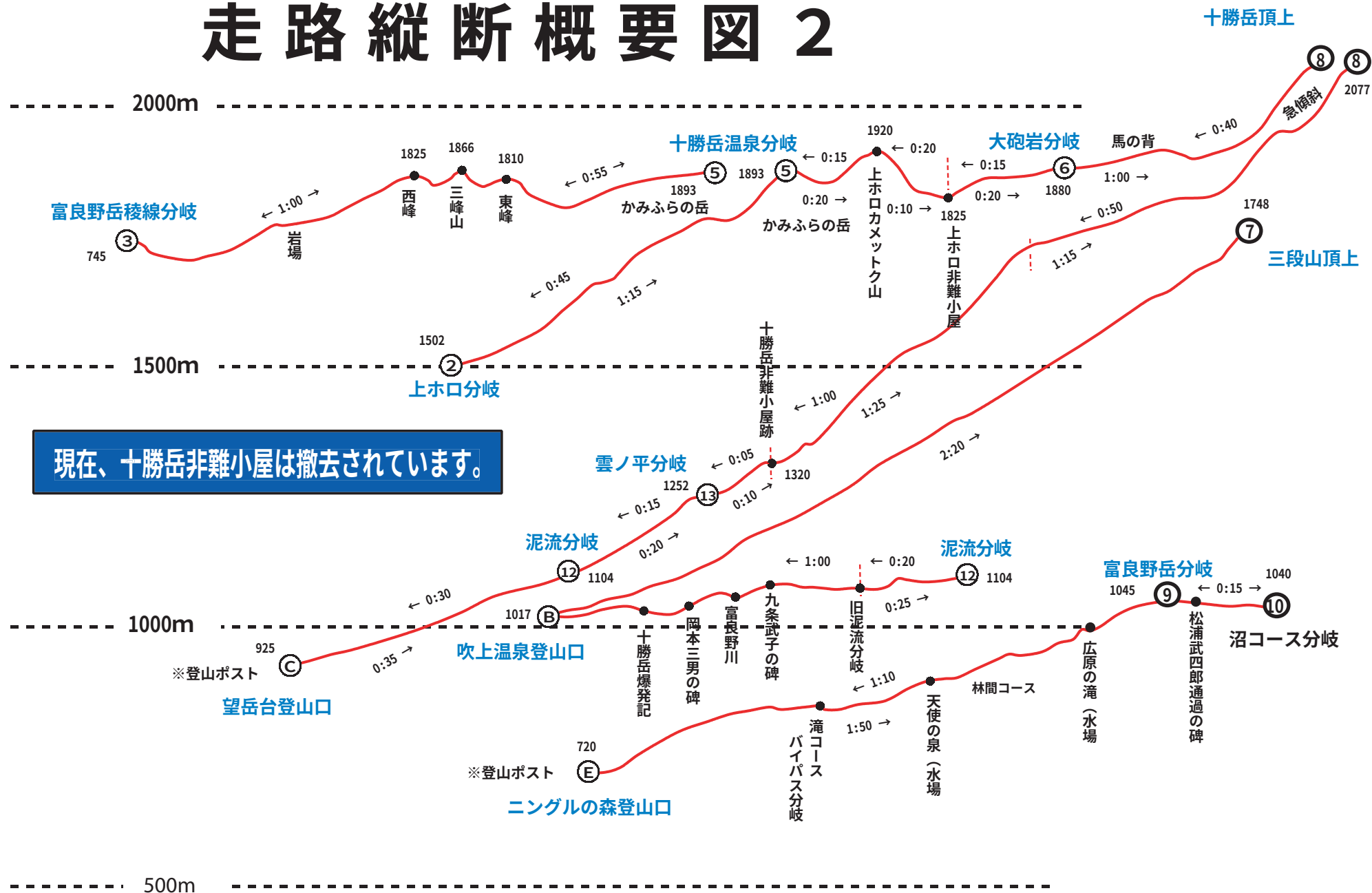
吹上温泉温泉周辺図

撮っていいのは写真だけ。
残していいのは足跡だけ。
持ち帰るのは思い出だけ。
すばらしい大自然の景色を楽しみましょう！

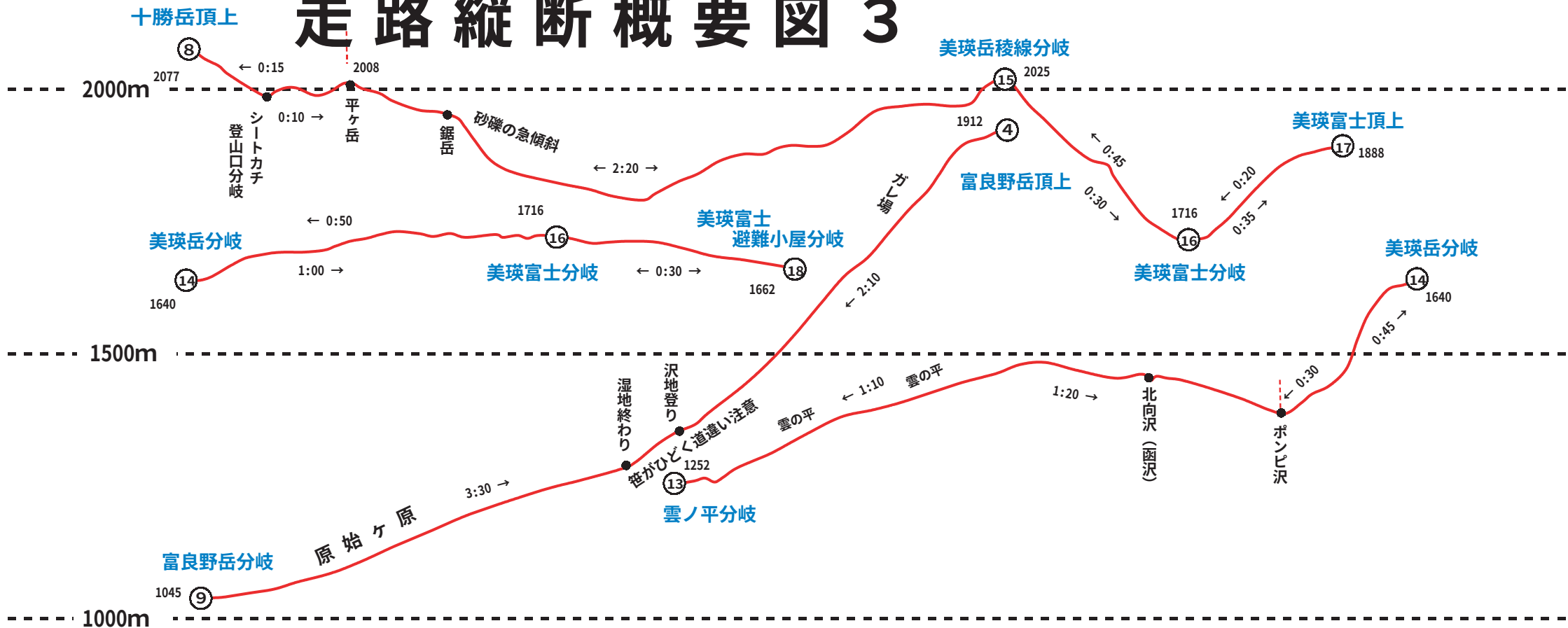
走路縦断概要図1



走路縦断概要図 2



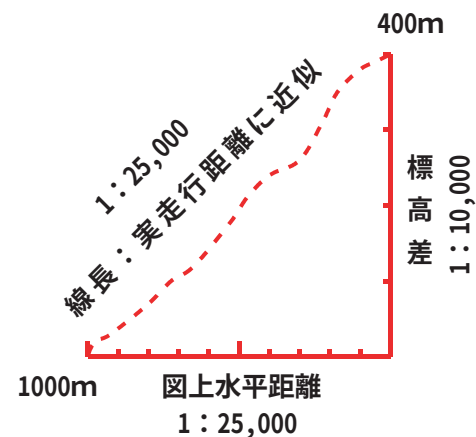
走路縦断概要図 3



※ コース時間は、1～2泊(野営)の中の装備(12kg程度)、中級者(年間少なくとも4～5回以上登山をする者)壮年4人のグループ、心拍数105～115回/分程度を基準(1時間当たり10分の休憩を含む)にしています。
一般には人数(A)、負荷重量(B)が増えれば時間は増加し、経験(C:メンバーのうち最も経験の少ない者)や体力(D:メンバーのうち最も体力のない者)によって増減します。補正の目安計算表によって概算時間を算出することができます。

補正のめやす計算表

補正係数	1.10	1.08	1.06	1.04	1.02	1.00	0.98	0.96	0.94	0.92
人数 A	1	2	3	4	5	10	50	100		
負荷 B	0	5	10	12	15	20				
経験 C	上級	中級	初級	初心者						
体力 D	スポーツ選手	青年	壮年	子供	高齢者					



十勝岳連峰登山の問合せ先

十勝岳温泉・吹上温泉登山口

[十勝岳本峰、富良野岳、上富良野岳、上ホロカメットクなど]

上富良野町役場（0167-45-6983）産業振興課商工観光班

白金温泉望岳台登山口

[十勝岳本峰、美瑛岳、美瑛富士、オプタテシケなど]

美瑛町役場（0166-92-4321）商工観光課観光振興係

布礼別ニングルの森登山口

[富良野岳、原始が原]

富良野市役所（0167-39-2312）商工観光課観光企業係

一般的な注意事項

- 十勝岳連峰は、比較的明瞭な稜線があり、コースはわかりやすくなっていますが、コースを外れると戻ることが難しい場合もあります。また、鞍部（コル）では広い平坦地形の所もあり、霧等で視界がきかないときには迷いやすいため、ペイントや杭のコース表示を見失わないように慎重に行動して下さい。
- 十勝岳連峰には、カミホロカメットク避難小屋、美瑛富士避難小屋がありますが、いずれも無人無料の施設で、自炊が前提になります。また、カミホロ避難小屋は雪渓の水場のため、水は携行した方が安全です。
- 雪渓は、8月に入ると消えてしまいます。また、雪渓の水場は、気温が低いときには流れが停止することがあります。水は、夕方までの気温の高いうちに確保しましょう。
- 避難小屋は、夏のシーズン中は混雑することが多いため、パーティーで行動する場合にはテントは必携です。また、避難小屋を利用する時には、携行品を広げて占拠するようなことはせず、ゆずりあいの気持ちをもって下さい。
- ヒグマについては、大雪山国立公園全域が生息地といえます。ヒグマに出あったら決してヒグマから目をそらさないように対峙して下さい。そのうちに立ち去りますが、緊迫が高まったような場合は、食べ物や持ち物を投げ与えて注意をそらして、落ち着いて遠ざかってください。不用意に逃げると、ヒグマにその気がなくても、本能的に攻撃行動に移ってしまいます。
- エキノコックス症予防のため、小川や沢水は煮沸して使用して下さい。原虫卵は、100℃で瞬時に、60℃で10分程度の加熱で死にます。※エキノコックス症については、巻末に囲み記事で概要を示します。
- 7月中旬～8月中旬の山の気温は、氷点下になることは極めてまれですが、日中でも5℃前後と低温になることはよくあります。特に、大陸からの高気圧（寒気団）がオホーツク海に居座ると気温が低下し、雲や霧の発生が多くなります。また、寒冷前線の動きには注意が必要で、この通過の際には雷雨が伴います。

【気象通報】 NHK第2 ①9:10～9:30 ②16:00～16:20 ③22:00～22:20

【周波数一覧】 旭川(1602Khz) 札幌(747Khz) 帯広(1125Khz)

- 日の出、日の入り時刻は概ね次のとおりですので、行動計画の目安にして下さい。

	6月下旬	7月前半	7月後半	8月前半	8月後半	9月前半
日の出	03:48 頃	03:52～ 03:59	04:00～ 04:18	04:19～ 04:35	04:36～ 04:52	04:53～ 05:10
日の入	19:16 頃	19:16～ 19:13	19:06～ 18:53	18:54～ 18:35	18:34～ 18:06	18:05～ 17:45

安全登山のための準備

- 登山計画は、ゆとりをもって避難コースや予備日を検討して作りましょう。入山の10日くらい前に、指定書式で登山計画書を作成し、下記まで提出（郵送可）して下さい。なお、所轄警察署や交番等出先に提出してもけっこうです。また、下山した場合は、速やかに計画書提出先に下山届（電話可）をして下さい。

警察への登山計画書の提出のほかに森林管理署への入林届が必要です。詳細は「楽しい登山のアドバイス」に記載

登山計画書提出先

〒078-8211

北海道警察旭川方面本部地域課(旭川市1条25丁目)

TEL 0166-34-0110

所轄警察及び出先

富良野警察署(富良野市若葉町11番1号)

TEL 0167-22-0110

上富良野交番(上富良野町宮町1丁目1番)

TEL 0167-45-2039

旭川東警察署(旭川市1条25丁目)

TEL 0166-34-0110

美瑛交番(美瑛町中町4丁目4番)

TEL 0166-92-2036

- 登山は、普段生活にない運動量があり、体力の消耗や思わぬケガで危険にさらされることがあります。他のスポーツと同様に、事前にトレーニングを行い、過信をしないようにしましょう。
- 出発前には天気予報を調べ、飲食物や睡眠などの体調管理に努めましょう。
- 服装や携行品をチェックし、山岳環境に対応した装備をしましょう。次に示すのは、山中野営指定地1泊2日の装備の基準ですが、登山計画に対応して適宜増減し、別の携行品を追加して下さい。

安全登山に適する服装や携帯品

服 装	下着用シャツ、カッターシャツ・ニッカーズボン等、スパッツ・靴下、帽子、軍手等手袋、セーター、ウインドヤッケ、登山靴、リュックサック又はサブザック 他
携帯品	ヘッドランプ又は懐中電灯、雨具、水筒又はポット、地図、磁石、時計、手拭、タオル、洗面具、ナイフ、予備靴紐、三角布、常備薬、マッチ、ライター、身分証明書、健康保険証、食器、食料及び非常食

- 単独登山はできるだけ避け、経験のある方と登るようにしましょう。また、出発前に登山計画を、家族や知人、友人、職場などに話してから出発しましょう。遭難などに際しては、大きな助けとなります。
- 天候がすぐれないときは、行動をひかえましょう。また、一般に午後からは天気が崩れやすいので、行動は午前中を中心に計画しましょう。

楽しい登山のアドバイス

- 登山には警察署への登山計画書の提出の他に、全域が国有林であるため管轄森林営林署への入林届が必要です。登山者が便利のように、それぞれの登山口付近に入林ポストがあり、入林届出簿へ記入すればよいことで、届出が簡略化されています。必ず記入しましょう。

十勝岳連峰入林ポストの場所と所轄	
十勝岳本峰・三段山・上ホロカメットク山・富良野岳方面	
場 所	①バーデンかみふらの前 ②十勝岳温泉駐車場 ③吹上保養センター白銀荘
オプタテシケ山・美瑛岳・美瑛富士・十勝岳本峰方面	
場 所	①登山口そば ②望岳台レストハウス内
富良野岳・原始が原方面	
場 所	①布礼別ニングルの森登山口

- バランスをくずした時に敏速に対応できるよう持物は背負って手には物を持たないようにしましょう。
- 山の天候は変わりやすいので、暖かくてもセーターや下着などの着替えを持ちましょう。また、雨具は非常時に風よけ・雨よけ・暖房にと多用途に使える必需品です。晴れていても必ず持参しましょう。
- はきなれた底が厚く、溝が深めで、土踏まずの部分がよく締まる靴が最適です。新しい靴は、靴ずれをおこして、楽しい登山をだいなしにしてしまうことがありますので、必ず事前に十分にはきならしましょう。
- 気温や行動の強度に合わせて、適切な体温を維持するよう、衣服の着脱をこまめに行い、余分な疲労を防ぎましょう。
- 食事や飲料水は少しずつ回数を多く、量ともに控えめにして、胃腸をいたわり体調の不調を防止しましょう。
- 霧などで視界がきかなくなった時に、自分がいる位置を知っていることが最も重要です。常に方向や目標物、位置を、磁石と地図で確認しながら行動しましょう。また、行動中はこまめに記録をつけましょう。
- 避難小屋、指導標は登山者の命綱です。いたずらなどは言語道断で、風雨や雪などで破損している場合には、応急修理をするぐらいの心構えを持ちましょう。
- 高山植物は、厳しい環境で懸命に生きています。歩道部を外れて踏み荒したり、休息で腰掛けたりしないようにしましょう。また、摘み採ったり、掘り起こして持ち帰ることは法律で禁止されています。

- 食事後の残り物や空カン、包装紙などは、非常時の食料や容器、燃料にもなります。クリーンな十勝岳連峰を守るためにも下山まで持ち帰りましょう。
- 山火事防止のため、喫煙の場所に気をつけ、携帯灰皿などを携行して吸殻のポイ捨てはやめましょう。また、国立公園内でのたき火は厳禁です。火気取扱に注意しましょう
- 登山中に、山岳パトロール員などの管理関係者や、他の登山者から注意やアドバイスを受けたときは、素直に従いましょう。
- 十勝岳連峰等北海道の山岳は、緯度的に本州方面より気象条件が厳しく、本州中部地方の標高3000メートル以上に匹敵します。数字上の標高だけを行動基準や登山計画に当てはめることはできません。
- 雪渓は岩がかくれていたり、穴があったり、末端が急に落ちこむこと、部分的に層が薄くもろい個所があることなど、危険が高いため十分に注意して通過しましょう。
- 救難信号と間違ふような無意味な旗、笛、灯火の点滅、大声等の合図はやめましょう。

最寄の野営場及び非難小屋・野営指定地

●最寄の野営場等

名 称	位 置	有料・無料の別	問合せ・申込	備 考
白銀荘野営地	吹上温泉保養センター白銀荘横	有 料	吹上温泉白銀荘 0167-45-4126	十勝岳・三段山・望岳台方面登山口
国設白金野営場	白金温泉	有 料	野営場管理事務所 0166-94-3209	望岳台登山口まで約6 km
美瑛自然の村	白金温泉野鳥の森	有 料	管理事務所 0166-94-3415	望岳台登山口まで約8 km
ニングルの森	富良野市布礼別原始林原入口	無 料	上川南部森林管理署富良野山部合同森林事務所 0167-23-8600	富良野岳・原始林原方面登山口

●山中避難小屋

名 称	位 置	人 員	管 理 者	備 考
上ホロカメットク避難小屋	上ホロカメットク山東北東 0.4 km	30	北海道上川支庁林務課	無料・自由使用 雪渓水場(8月上旬まで)
十勝岳避難小屋	施設老朽のため取壊し済み			
美瑛富士避難小屋	美瑛富士東 1.0 km	20	上川中部森林管理署美瑛合同森林事務所	無料・自由使用 雪渓水場
ニングルの森管理ハウス	原始林原入口	—	富良野市	市役所(39-2312)へ連絡通常がが掛っている

●山中野営指定地

名 称	位 置	テント数	備 考
上ホロカメットク山	上ホロカメットク避難小屋横	30	雪渓水場(8月上旬頃まで、次第に遠くなり、減少)
美瑛富士	美瑛富士避難小屋横	20	雪渓水場(7月下旬頃まで) (別の近くの沢の水場あり)

登山中緊急にやむなく上記以外の場所で野営するときは、高山植物を痛めないよう、また、タバコ等火気の取扱には十分注意して下さい。国立公園内でのたき火は一切禁止です。更に、周辺の地形をよく確かめて、残雪雪崩、鉄砲水の危険がないか、地形的に突風の恐れがないかなど、慎重にかつ総合的な安全を判断することが大切です。

緊急時の連絡・対策機関

この連絡先は、24時間体制をとっており、いつでも連絡がとれます。

登山基地	連絡先	電話位置	病院から登山基地までの距離
十勝岳温泉 ・吹上温泉	富良野警察上富良野交番 TEL 0167-45-2039 上富良野町立病院 TEL 0167-45-3171 上富良野町役場総務課 TEL 0167-45-6400	十勝岳温泉凌雲閣 TEL 0167-39-4111 吹上温泉白銀荘 TEL 0167-45-4126	18.0 km
白金温泉	旭川東警察美瑛交番 TEL 0166-92-2036 美瑛町立病院 TEL 0166-92-2151 美瑛町役場総務課 TEL 0166-92-1111	望岳台レストハウス TEL 0166-94-3201	24.0 km
ニングルの森	富良野警察署 TEL 0167-22-0110 富良野協会病院 TEL 0167-23-2181 富良野市役所総務課 TEL 0167-39-2300	富良野市布礼別市街 ニングル登山口から布礼別まで約10 km、最寄の民家まで5 km。	24.0 km

※ケガ・急病の場合、救急車の依頼搬送はできるが、いずれも距離があって時間ロスを生じるので、電話等で受入依頼後自力搬送した方が良いこともあります。

登山口案内

～ 駐車場・宿・周辺の概要～

十勝岳連峰の自動車で行ける、一般的に利用される登山口は、十勝岳連峰概要図に示すA～Eの5か所があり、次のような状況になっている。

その他に登山基地となっている宿泊施設のある温泉地から、この5か所までを結ぶ歩道（登山道）もあり、公共交通手段がない、又は交通手段を使わない、使えない登山者の手段になっているが、この案内では取り上げないので、これを利用する際には各宿泊施設に問い合わせ願います。

A：十勝岳温泉登山口

十勝岳温泉へは、国道237号から分岐し、舗装された道道吹上上富良野線が上富良野市街から結んでいる。上富良野駅から町営バスが運行されているが、便数が少ないので大半は自家用車を使っている。

また、美瑛市街と十勝岳温泉を結ぶ道道十勝岳温泉美瑛線を利用して、白金温泉、望岳台、吹上温泉を経由するルートもある。白金温泉街までは、道北バスの路線があるが、白金温泉と吹上温泉の間のバス路線はなく、10kmを超える距離があるので、自家用車を利用するのが一般的である。

[望岳台～吹上温泉白銀荘間は10月中旬～5月末閉鎖]

十勝岳温泉登山口は、道路終点の駐車場横にあり、入林ポストが入口にたっている。駐車場は、乗用車で50台程度収容できるが、シーズン休日は満杯となり、路側まではみ出してしまう。そばの凌雲閣に許可を得て、旅館駐車場を利用させてもらう方法もある。公衆便所及び水場があるので、ここで登山準備ができる。

宿泊施設としては、登山口そばの『凌雲閣』のほかに『カミホ口荘』、『バーデンかみふらの』があり、この2軒と登山口は翁遊歩道で結ばれている。

★宿泊施設利用予約・問合せ

宿泊施設名	電話番号	登山道までのおおよその時間
十勝岳温泉凌雲閣	0167-39-4111	
十勝岳温泉カミホ口荘	0167-45-2970	歩道20～30分
ヒュッテバーデンかみふらの	0167-45-2225	歩道40～50分

B：吹上温泉登山口

十勝岳温泉登山口と同様に、道道を使って上富良野市街、美瑛市街の両方から入れる。上富良野駅前からはバス路線があるが、美瑛市街側からのバス路線は白金温泉止まりなので注意が必要。また、道道の望岳台～吹上温泉白銀荘間は10月中旬～5月末の冬期間は閉鎖される。

吹上温泉保養センター白銀荘があり、白銀荘の許可を得て、この前の野営場（有料、水、トイレあり）が利用できる。白銀荘は調理器具が備えられた自炊ヒュッテなので、利用する際には食材を

用意する必要がある。

駐車場は乗用車100台、大型バス5台が収容することができ、施設内には天然温泉の浴場と露天風呂があり、なお、徒歩10分程度のそばには、無料、終日利用できる吹上憩いの広場の『露天の湯』があり登山の汗を流せる。

★宿泊施設利用予約・問合せ

宿泊施設名	電話番号	登山道までのおおよその時間
吹上温泉保養センター白銀荘	0167-45-3251	

C：白金温泉望岳台登山口

交通事情は登山口Aを参照。名前が示すとおり、視界が広がる地点で眺めが良いため観光客の立ち寄り場所ともなっている。

望岳台レストハウス（食堂・売店・トイレ・電話）があるが宿泊施設はなく営業時間（8：00～17：00）以外は無人になる。入林届簿はレストハウス内にあるため、閉業時には、メモにリーダーの住所、氏名、電話番号、車両番号、人数、入下山（予定）日時等を書いて、ドアに挟み込んでおけば届簿に記入してくれる。

いつでも利用できる屋外トイレもあり、レストハウスの営業時間内であれば、現地での買物も含めた登山準備ができる。

最寄りの宿泊施設は、白金温泉にあるが、登山口までは歩道で約4km（1時間10分）、車道で約6kmである。

白金温泉地区の宿泊施設や野営場等の利用や問い合わせは、白金観光センターか白金インフォメーションセンターへ。無料の駐車場は十分な広さがあり、自家用車で100台以上は収容できる。しかし、観光客の立ち寄り場所でもあるため、シーズン休日はかなり混雑するので注意が必要。

★宿泊施設利用予約・問合せ

施設名	電話番号	
白金観光センター(観光案内)	0166-94-3025	
白金インフォメーションセンター(総合案内)	0166-94-3355	

D：美瑛富士登山口

平成7年9月13日に強風で倒壊し平成8年8月11日に新築再建された美瑛富士避難小屋（無料・自由使用・雪渓水場）まで1本道の登山道で、一般の利用者は少ない登山口である。白金温泉街から約2km、大雪青年の家を過ぎて、白金野鳥の森や自然の村キャンプ場へ向かう舗装道路の右手に、上川中部森林管理署の管理する涸沢林道の入口がある。

ここが美瑛富士登山口の入口だが、ゲートがあるため、一般利用の場合は路側の余地をさがして車を捨てなければならない。

上川中部森林管理署の許可を得れば、約2km弱先の事実上の登山口（入林ポストはここにある）まで乗り入れることができるが、車の駐車、乗り捨ては禁止されているので、ゲート外まで出す必要がある。タクシーや送迎バス等を使用する場合には、あらかじめ森林管理署に許可を取って乗り入れれば、単調な林道歩きを避けることができる。森林管理署では、平成6年に林道を舗装、駐車場も整備したので、近い将来にゲートが開放されるようであるが、しばらくは我慢が必要。

宿泊は登山口Cと同様に、白金温泉地区の宿泊施設か野営施設を利用することになる。

★湊沢林道ゲートの問合せ：上川中部森林管理署 0166-61-0206

E：布礼別ニングルの森登山口

富良野市街から登山口までは約2.4kmあり、道路分岐も数多く経なければならないので、道筋を尋ねることを勧める。

富良野駅前から布礼別へは、舗装道路をたどりながらも特に道が判りにくく、現在位置によって経路が多数あるので、地図を片手に地元の人に聞くと良い。更に、布礼別市街からも判りにくいので、現地の人に再度教えを請うべきである。教えられた道を、布礼別から約3.5km進むと、右手に「原始ヶ原入口」の看板表示があり、布礼別林道に入る。砂利道が続き、左右に作業林道が分かれるが、看板から約4.8kmかまわずに道なりに直進すると、終点に開けた場所に出る。

ここがニングルの森で、かつては営林署の森林施業の土場で、少しデコボコだが、駐車場に使われるけっこう広い空間がある。この一角に入林ポストがあつて、登山口となっているが、水場はない。6月中旬の山開きの時に仮設トイレが設置されるがオフには撤去される。富良野市の施設でニングルの森管理ハウスがあるが、通常は施錠してあるので、使用する場合は市役所へ問い合わせが必要。

側に流れる布部川沿いに飲用できる湧水が多いので、水に苦労はしないが、エキノкокクス汚染の可能性が高いので、煮沸利用すべきである。また、駐車広場部分では野営も可能だが、営林署への手続きが必要なので、事前に問い合わせてもらいたい。

★ニングルの森問い合わせ：富良野市役所商工観光課 0167-39-2312

登山道案内

～分岐・節点の概要～

オプタテシケ山から以北のトムラウシ山及び大雪山群へつながる、いわゆる「十勝・大雪縦走コース」については触れていません。それぞれの市町村や管轄機関に問合せてください。

① 三段山分岐

十勝岳温泉登山口から安政火口へ向かい、比較的広い登山道を0.9km、約20分進むと、左側に三段山への登山道が分岐する。看板が立っているので見失うおそれは少ない。

② 上ホロ分岐

十勝岳温泉登山口から安政火口を経てきた道が、この地点でY字に分岐し、左側は上ホロカメットク山へ、右側は富良野岳方面へと続く。普段は水の流れがない、大きな丸岩が露出した沢地で、6月下旬まで雪渓が残ることもあって、分岐看板が隠れていることもあるので注意が必要である。

③ 富良野岳稜線分岐

十勝岳温泉登山口から富良野岳へのコースが稜線部へ出た地点で、左手北東方向へは三峰山、上ホロカメットク山方面、右手南西方向へは富良野岳へジグザグに登る道の分岐点である。

④ 富良野岳頂上

標高1912mのピークで、北東方向に十勝岳連峰の山列が続き、南西方向に前富良野岳1625m越しに、芦別岳をはじめとする芦別山地が望める。南から南東方向は、富良野岳と前富良野岳の裾野に広がる高層湿原「原始ガ原」が見下ろすように一望できる。

⑤ 十勝岳温泉分岐

富良野岳から、三峰山、上ホロカメットク山を経て十勝岳方面への稜線上の登山道から、上ホロ分岐を経由して十勝岳温泉登山口へ向かう登山道が分岐する。このピーク(頂上)は上富良野岳(1893m)となりこの標示のほかに、柱状の分岐標識があるので間違えることはないが、西側へ急傾斜を降りる道筋なので、間違えたかと心配になることもある。

⑥ 大砲岩分岐

上ホロカメットク山と十勝岳の稜線から、西へ突きでた岩場があり、遠くから見ると砲台のように見えることから、この名がある。ここから大きくかつ深く侵食された沢地形越しに、三段山が眼前に見える。

この三段山(⑦)へのルートがあるが、崩落、落石、転石が起きやすく、上級者も避ける難コースである。現在は危険なため、閉鎖して利用が禁止されている。

⑦ 三段山分岐

標高1748mの三段山頂上であるが、十勝岳連峰主列に2000m前後の峰が続くので、圧倒されて低く見える。

南方向は断崖となって、噴気を続ける安政火口（旧噴火口：十勝岳本峰の火口を新噴火口と呼ぶ）に落ちこみ、すり鉢状地形と奇岩が絶景となっている。

西方崖状稜線に沿って十勝岳温泉登山口へ下る道と、北方急傾斜を下り吹上温泉登山口へ至る道がある。かつて利用された大砲岩（⑥）へのコースは、危険閉鎖中。

⑧ 十勝岳頂上

十勝岳連峰の主峰、標高2077mで、西北西方向眼前に噴煙を吹き上げながら、活発に活動する新噴火口（62-II火口）が見下ろせる。

望岳台登山口、上ホロカメットク山、美瑛岳へ結ぶ登山道が、頂上から3方向に下る。指示標柱があるが、視界の悪いときに予定外のコースをたどってしまい、引き返さなければならないこともしばしばあり、慎重に表示を見失わないようにたどる必要がある。

⑨ 富良野岳分岐

ニングルの森登山口から、富良野岳を目指して林間コースを約2.6km、休憩を挟んで1時間50分歩き、アカエゾマツの林を抜けると原始ケ原の湿原に出る。間もなく富良野岳方面を左に、右には湿原の中を五反沼(ごたんぬま)、及び途中から分岐して滝コース経由でニングルの森登山口へ戻る道を分ける。

案内看板はあるが、踏分け道を忠実にたどる必要がある。ほとんど高低差のない平坦部なので、視界がきかないときには、迷い始めるとなかなか道に戻れず、また、方向も判らなくなるので慎重な行動が求められる。

⑩ 沼コース分岐

⑨の富良野岳分岐から五反沼へ向かい、約500m、15分進むと、右手にニングルの森登山口に下る滝コースの分岐点がある。

案内看板はあるが、湿原の平坦地なので方向と踏み跡を見失なわないことが必要である。

⑪ 五反沼終点

湿原の中の沼コースの終点で、透明な水をたたえた大きな沼にいたる。ここが終点で、来た道を引き返すことになるが、美しさに見とれて辺りを動きまわり過ぎると、コースを見失うことにもなる。また、エゾシカが沼を水場に行っているの、鹿の踏み跡を帰り道と間違い、ほうこうすることもある。極めてまばらに生えている木には、マークテープがところどころにあるが、霧が濃い時には、これも見つけられない。

⑫ 泥流分岐

望岳台登山口から旧十勝岳避難小屋（現在は取り壊されている）方向に向かって登山道が延びている。かつては、このコースと連峰に向かって右手方向に、大きく迂回する傾斜のゆるやかなコー

スがあったが、平成6年の集中豪雨で土砂が流出して分断された。これ以降は十勝岳噴火活動対策の泥流センサー等の観測機器管理用道路と併用で整備されたが、年に数度の豪雨のたびに流失、補修の繰り返しが続いている。この迂回コースに、吹上温泉登山口（白銀荘）に向かう歩道分岐があるが、集中豪雨の流下区域を横断するため、浸食で年々姿を変えている。

⑬ 雲ノ平分岐

望岳台登山口から泥流分岐を過ぎて、旧十勝岳避難小屋を目前にしたところで、十勝岳本峰方面と、雲ノ平経由で美瑛岳、美瑛富士方面への道が分かれる。コース表示はしっかりされているが、見過ごす可能性はあるのでご注意ください。

⑭ 美瑛岳分岐

雲ノ平を進み、ポンピ沢からの急な登りが一段落すると、右手に美瑛岳への道が分岐する。6月下旬から7月上旬までの比較的遅くまで雪渓が残る場所で、分岐表示が雪の下に隠れていることも多い。この場合は、雪渓上の先走者の踏み跡に注意しながら登る必要があり、先走者がいない場合は遠望等で、早めに道筋を発見することが求められる。

⑮ 美瑛岳稜線分岐

美瑛岳は、十勝岳から美瑛富士への稜線沿いの登山道からそれている。美瑛岳を経由して⑭の美瑛岳、雲ノ平へ向かう者と、美瑛岳頂上から折り返す者が利用する分岐である。

美瑛岳へ向かわない者の近道走路が、いく筋か広がって踏み分けでついているので、霧などで視界がきかない時には、岩に付けられたペイントマークを忠実にたどる必要がある。

⑯ 美瑛富士分岐

美瑛富士の頂上を目指すのはこの地点からである。雲ノ平から美瑛富士避難小屋、オプタテシケ山方面へ向かう走路と、美瑛岳方向から下りそのまま美瑛富士へ登る走路が、この分岐で十字型に交差する。

美瑛富士頂上へ向かう者は、再びこの分岐へ戻ることになるため、荷物をこの場にデポジット（仮置き）していることがある。置き忘れではないので、いたずらや中を確かめたりしないであらう。

⑰ 美瑛富士頂上

まさしく遠望は富士山のように十勝岳連峰の稜線から孤立して、標高1888mの円錐形の山様を示している。この形からどの方向からでも登り、降りられるように錯覚して正規走路を外れて、とんでもない悪路に苦労する者も多い。というのも、頂上から美瑛富士避難小屋が見下ろせるため直降したくなるのだが、遠まわりでも正規走路以外は、高山植物保護のためも含めてやめるべきだ。

⑱ 美瑛富士避難小屋分岐

美瑛富士登山口から1本道で延々と登ってくる登山道と、連峰縦走登山道が落ち合う分岐で、分岐そばに美瑛富士避難小屋と、この小屋周辺的美瑛富士野営指定地がある。

往復5時間を超えるオプタテシケ山まで足を延ばすかを迷う地点でもあるが、石垣山、ベベツ岳

と距離の割には登り返しが続く辛い行程なので、疲労が強い時にはキッパリとあきらめるべきである。この分岐と石垣山の間、斜面の途中から美瑛富士避難小屋への近道の分岐があり、小屋の利用者はほとんどこの道を使う。

⑭ オプタテシケ山頂上

十勝岳連峰登山の北端となっており、これから先に足を延ばすのは、十勝岳連峰～大雪縦走か、十勝岳連峰～トムラウシ温泉の登山者のみである。

このため、オプタテシケ山以北のコースについては、この案内ではふれないので、美瑛町、東川町、新得町他に問い合わせ願いたい。

山頂標高2012mから北西に延びる中央稜と、これを大きく包み込むように延びる東尾根と西尾根が、上富良野、美瑛市街から眺めると女性の乳房を思い浮かべる形に見える。

コースの概要

登山口A～E及び分岐等①～⑨は前記のとおりだが、この間を結ぶ経路の概要を示してみる。起点は、両端のうち標高の低い方に置き、もう一方に向かって進む走路を経ることとする。両端の標高差が明確でない場合は、番号の若い方を起点にしている。

河川、沢の右岸、左岸は、普通に使われるように、川下に向かって右側を右岸というように示す。また、各経路の走路縦断概略図を添付してあるので、コース計画を立てたら、この図をコピーしてコース順に貼り合わせて見ると、登り下りの概要がつかめる。

[A～①]

十勝岳温泉駐車場の横に入林ポストがあり、安政火口（旧噴火口）へ向けて比較的広い歩道が、ハイマツの中を延びている。単調な登りをゆっくり20分進むと、左手に三段山方面への分岐点に到達する。来た道を振り返れば、十勝岳温泉凌雲閣の建物が比較的近く見える。

[①～②]

三段山分岐から更に約20分ハイマツの中を進むと、大きなすり鉢状の安政火口の入口に入り、火口を源流部にするヌッカクシ富良野川へ向けて10m近く下る。普段は涸れ沢だが時にはチョロチョロと流れるぬるい川を渡り、対岸を少し登ると岩に富良野岳・十勝岳方面の矢印がある。

この地点で安政火口に向かって立つと、左手斜面の中腹に夫婦岩と呼ぶ大小の2本の柱状岩、夫婦岩の上のピークが三段山の頂上、正面火口壁の上に盛り上がるピークは上ホロカメットク山、右手斜め上方には人の手のように多くの尖りをもつ八手岩が望める。

右手の斜面をほぼまっすぐに高度を上げる登山道を登るが、この途中で左を見上げると人間の額のように丸く飛び出た化物岩がある。ここからではわからないが、上富良野岳（十勝岳温泉分岐）から下ってくる道筋で300階段が始まる尾根筋から見下ろすと、まさしく人の顔型の岩であるのが良くわかる。安政火口の沢から15分弱で通称D尾根に出て、この先の流水のない沢を登る。尾根から5分余りで上ホロ分岐に着く。この沢は、6月中旬頃までは雪溪で埋まっており、分岐点も雪の下で見えないことがある。

[②～③]

上ホロ分岐を右手に登るが、富良野岳稜線分岐の手前までは、三峰山と富良野岳の中腹部をトラバース状に、小さな沢地形越えを繰り返しながら高度を徐々に上げていくコースである。

上ホロ分岐から小尾根を一つ越えると三峰山沢の上流の沢に出る。ここの水は飲用できるが、最近キタキツネが登山者の与える餌をねだって出沒しているので、エキノコックス感染防止のためには、生で飲むべきではない。この沢を250mほど下ると雄鹿の滝があるので、行程に余裕がある場合は、十分注意をしながら寄り道をするのもよい。

正規コースに話を戻し、7～8分ほど先に進むと、再び沢に出る。飲用には適さないが、雪溪が

7月上旬頃まで残っている。ここから一旦下がってからすこしきつい登りをつめると、比較的広いスペースがあるので、よく大きな団体登山が大休息をとる。

ここを過ぎると、余り起伏のないトラバースになり、前方に富良野岳が近づくと同時に、左手には富良野岳～三峰山稜線直下の岩場の下に出る。この地点から岩場を巻いて急な登りが始まり、息をきらして400mほど登り切ったところが富良野岳稜線分岐である。

[③～④]

富良野岳稜線分岐から三峰山方面の道を後に見て、富良野岳山頂を目指す。ここから頂上まではとにかく登りで、途中息継ぎのできる平坦部はあるとはいえ、分岐点標高1750mから山頂1912mへ向けて、短距離を50分ほどをかけて高度を上げることになる。

道の左右に多種の高山植物が群生しており、6月下旬から7月中旬の開花重複の時期にぶつかれば、斜面のお花畑を堪能できる。

ただし、走路左手斜面には、滑落したら止める方法がないような急傾斜部分があるので、花に見とれるのもほどほどに慎重に進みたい。間もなく富良野岳頂上に到着すると、眼下に広大な高層湿原原始ケ原が広がり、西から北方向には富良野盆地、上川盆地が一望できる。

[③～⑤]

富良野岳稜線分岐から、富良野岳方面を背にして、瓦礫道のペイントマークをたどりながら降りると広い鞍部（コル）に出る。この部分は稜線を外れているので、視界がないときには方向感覚を失うが、比較的踏み跡がしっかり付いているのでこれをたどれば心配はない。この登り進むとやがて左右に急傾斜が落ちこみ、大岩が積み重なる稜線部の登りに入る。

三峰山は名前のとおり、峰間直線距離200m余りの明瞭な東西に並ぶ3つの峰からなり、中央の峰が1866mの主峰で頂上標が建っている。

大岩稜線の登りから、この西峰への本格的な登りになり、中央峰、東峰へと短いがきつい登り降りが続く。最後の峰を降りると、再び少しきつめの長い登りの東側に張り出した台地状の地形になって、これを登りきり少し進むと十勝岳温泉分岐に到着する。

このきつめの登りから台地地形の部分は、踏み跡が明瞭ではないため、視界が悪いときに東側へコースを誤ると迷走する危険がある。正規走路は西側に落ちこんでいる急な断崖の稜線についているので、視界が悪いときには、この断崖と稜線を意識して西よりを注意しながら進むのが良い。

[②～⑤]

上ホロ分岐から、富良野岳方面の分岐道を右に見て、若干足場の悪い沢地形を登る。6月中旬ころまでは、この沢は雪渓で埋められているため、かえって歩きやすい。次第に登りがきつくなってくると、コースは沢から右手の尾根方向に移り、この辺りから階段が始まる。

整備当時は快適なものであったというが、現在はステップ部分が雨水で侵食され、残された木組が陸上競技のハードルのようになっていて、特にコンパスの短い子供や女性を悩ます。この階段が、約300段（現在は一部流失されて280段程度）続くのである。

すり鉢状の安政火口は、西方の十勝岳温泉方向に開いており、北の三段山をピークにする崖尾根と、連峰主稜線の大砲岩から延びる通称OP尾根、東側は上ホロカメットク山をピークにする連峰主稜線、南側は通称D尾根が十勝岳温泉登山口方向から十勝岳温泉分岐の主稜線にすりつけている。

息を切らして300階段を上り詰めると、この火口壁南稜のリッジ状D尾根に出て、急に視界が開ける。しばらくゆるやかな登りが続いた後、つづら折に登る急傾斜になり、登りきると稜線部の分岐に到着する。

急傾斜の直前には、例年7月上旬まで残る雪渓があり、この雪渓の後退とともに高山植物が開花するため、本来は花期が異なる多数の植物を、狭い範囲で同時に見ることができるポイントである。

【①～⑦】

三段山分岐からすぐに小さな沼に出るが、この沼を左に見て前方に立ちはだかる崖尾根を、これから登るのである。この崖尾根右手のピーク点が目指す三段山の頂上で、この辺りから見ると三段山の命名が理解できる。というのも、崖尾根の稜線が明瞭に右手に上段、正面に中段、左手に下段の三段になって見えるからである。

しばらくハイマツの中を尾根に向かって登ると、次第に勾配がきつくなり、この先では岩や木につかまりながらのよじ登りになる。この岩場の石は、節理があって割れやすくもろいので、うかつに体重をかけるのは危険である。また、おおいかぶさるような上部岩場からの崩落石も十分注意して、少しでも早く察知するよう、聴覚、視覚の動員も忘れてはならない。

これを過ぎると三段状の崖尾根の中段稜線上に出る。あとは、右手に断崖ですり鉢状に落ちこむ安政火口を見下ろし、左手は一帯のハイマツを見て、ひたすら三段山頂上を目指すことになる。

天候が良く視界がきく時には、連峰主稜線を一望できるので、地図と磁石を片手に各ピーク名を確認するのも一興である。

【⑤～⑥】

十勝岳温泉分岐から北東眼前、直線距離で約400m、標高1920mの上ホロカメットク山を目指して急ながれ場を下り、コルから登り返す。コルからは上ホロ山頂を経由せずに迂回して上ホロ避難小屋へ行く道もあり、重装備を持ち体力を温存したい者は、右手へ踏み分けるこのコースをたどる。

上ホロ山頂を過ぎ岩場を下り始める点で、稜線から東へ30m余りはずれた所にある上ホロ避難小屋がはるかに見降ろせる。この下りは、急な岩場からがれ場になるので、足元に注意が必要である。これを降りきった地点から、鉄杭に結んだガイドロープが東方の上ホロ避難小屋へ延びている。

この地点は、霧が濃くなる場所で、わずか30m弱の所の小屋を発見できないことがあるので、利用の場合は注意が必要である。

上ホロ避難小屋前から十勝岳山頂までは、霧の発生が多く迷いやすい地形であるため所々にガイドロープが設置されている。このガイドロープと踏み跡のゆるい登りをたどると、左側にせりだした大砲岩分岐に到着する。

大砲岩～三段山コースが表示してある登山マップやガイドがあるが、現在このコースは侵食、風化によって極めて危険な状態になっているため、一般利用は閉鎖されて分岐表示は取り外されている。

閉鎖・禁止ルート [⑥～⑦]



既刊の登山マップやガイドには、このコースが示されているものがあるが、現在極めて危険な状態になっているので閉鎖、利用禁止されている。しかし、緊急時の場合、緊急性と危険度を秤にかけた連峰主稜線からのエスケープ・ルートとして使用されることもあるので、下山方向の概要を示しておく。大砲岩の場所には、十勝岳と上ホロカメットク山の方向表示をした標柱が立っているが、ここから主稜線と直角に西に延びるOP尾根方向がコースである。大砲岩からのOP尾根稜線は、人が立てないリッジ状なので、大砲岩の南側を巻いて、リッジ直下の足場を選んでしばらくトラバースする。岩は脆く崩れやすいので、一步一步3点支持を確保しながら200mほど進んだ後、三段山・OP尾根・フリコ沢・安政火口の裾合鞍部を目指して下る。この下りについても、急ながれ場である上に、侵食で岩が浮いており、不注意で落した一個の岩が増数して下方のパートナーを襲う危険性が高い。細心の注意でコルに降りた後、三段山へ向けて急傾斜を登り返す。少し進むと、まともには越えられない岩場が立ちばかり、ここをへばり付くように越え、更に続く急傾斜を登りつめると三段山の頂上に立つ。

このコースは、踏み跡が明確でない上、コース表示はあるにはあるが、迂回を余儀なくされる場面も多く、ないものと思った方がよい。

[⑥～⑧]

大砲岩からは、晴れていれば円錐形の十勝岳が、直線で約1.2kmの間近に見える。ほとんどまっすぐで、緩急はあるが登り一方の『馬の背』と呼ぶ道筋のため、進めども近づかないという錯覚を感じることもある。

所々のガイドロープ伝いに30分ほど進むと、傾斜がゆるく、溶岩噴石が広く降り積もった場所に出る。踏み跡がつかない平坦地であるため、ガイドロープを見失わないように、連峰主峰十勝岳の2077mに向かって急になるジクザクの道を登りきると、岩場の頂上に出る。

頂上には分岐標識、頂上標の他に、「光顔巍々(こうげんぎぎ)」と彫込んだ石柱がある。「あれはなんだ？」という問合せが多いので、この機会に説明しましょう。

上富良野の門信寺(もんしんじ)門上住職の発起で、門信寺信徒、岳人仲間、上富良野役場が協力して、十勝岳頂上碑を設置することになった。刻字は、浄土真宗經典「大無量寿經」の「贊佛偈(さんぶつげ)」の冒頭經文「光顔巍々」をそのまま取ったもので、「高々とそびえ立つ峰々は、光に輝く仏の顔のようにおごそかである」の意味である。昭和17年7月、総勢30数名のうち村内青年団長15人が運搬を担当、花崗岩の石柱を土橇に乗せて引上げ設置した歴史あるものである。

[B～⑦]

吹上温泉登山口は、白銀荘の前庭のキャンプ場のノリ面の階段を登った点にある。入林届は白銀荘に備えられているので、管理人に申し出て記入を済ます。

目指す三段山から延びる裾野を登っていくが、冬には三段山から吹上温泉白銀荘までの山スキーコースになっていて、『三段スロープ』又は『宮様スロープ』と呼ばれている。

登山口からしばらくは、深いチシマザサの中を延びる道が続き視界が悪い。

1時間余りで標高1300m付近の森林限界を抜けて、左手に富良野川源流部のフリコ沢越しに、噴煙を上げる前十勝岳と主峰十勝岳が見えるようになる。

植生もハイマツ、ナナカマドなどの低木になって、地表にへばりつくように高山植物も見られるようになる。この辺りから登りがきつくなり、しばらく登った後、道筋を右手に変えると頂上は近い。最後の仕上げのような急な150mほど登りをつめると、そこが三段山1748mの頂上である。ついでに示しておくが、山頂のコース表示に「白金荘」の方向指示があるが、これは吹上温泉登山口の「白銀荘」の間違いである。

[E~⑨]

ニングルの森登山口からは、富良野岳及び原始ヶ原方面へ、滝コースと林間コースの2コースがある。このうちの富良野岳分岐までの林間コースであるが、この分岐から先に足を延ばす時は、湿原の中を歩かなければならないので、防水性の高い靴を勧める。

登山口の入林ポストを出ると、すぐに左に滝コースを分けて、300m近い急な登りにかかる。この後しばらくは、ゆるく登り下りをしながら次第に高度を上げるトラバース道になる。途中右手に急に下る道がY字状に分かれるが、滝コースへのバイパスになっており、このバイパスから滝コースを経て、不動の滝、銀河の滝を觀賞しながら引き返せば、2時間程度のショートコースとして楽しめる。このバイパスを過ぎて400mほど進むと、走路左手に天使の泉の看板があり、岩場から飲用できる冷たい水が湧きでている。

トラバースから知らず知らずのうちに尾根筋に出て進むが、やがて急に左手の藪の中に道が折れ、沢（三の沢）沿いになる。折れてから400mほどで広原の滝があり、このすぐ上流を丸太と石伝いで三の沢を渡る。この沢水は水質的に飲用できる。

沢を渡ると、滑りやすく急な林間の登りになり、登りきって平になるとすぐに原始ヶ原外縁の湿地に入って、間もなく富良野岳分岐に到着する。

[E~⑩]

ニングルの森登山口から2コースのうちの、布部川沿いに多数の滝をめぐりながら登る滝コースである。幾度か丸太橋や石伝いで流れを渡るが、基本的には足を濡らすことはない。しかし、うっかり踏み外して落水することや、湿原の中も歩くことになるので、完全防水の靴か、あるいは濡れるのを覚悟した靴を選ぶ。若干危険な場所があるが、冒険心をかきたてる要素がふんだんで、子供たちが喜ぶコースである。

登山口から滝コースに入るとしばらく右岸を進み、約600m地点本流に銀河の滝、約1km地点本流に不動の滝に合う。約1.5kmで手摺りワイヤを張った10m余りの丸太橋で左岸に渡るが、不動の滝とこの丸太橋の間で、左手に分ける林間コース～滝コースのバイパス道がある。

丸太橋を渡ってすぐに、対岸に支流が無数の糸状に落ちる錦糸の滝がある。

岸壁の迂回やしがつくような悪路を進むと、やがて本流に2段になって落ちる二段の滝が、次いで対岸(右岸)に水量の多い三の沢が蒼天の滝となって落ちるのが望める。

この先で再び丸太橋で再び右岸に渡り約900mを、岩を跳び渡り、岸壁を迂回しながら進むと、

どちらが支流か判らないほどの水量で右岸に分かれる五の沢にぶつかる。

これを石と倒木丸太を使って渡ると二又左右に道が分かれる。右は布部川に沿って赤岩の滝までを往復する支線道で、300m弱で滝に到着する。

五の沢は真水で、支線道沿いに入った布部川は鉄分を含んだ酸性であるため川底や水の流れる岩は赤茶色に変色しており、赤岩の滝の由来になっている。

滝から引き返し二又のもう一方を登ると、正面に昇竜の滝が現れる。この滝の下を飛び石で対岸に渡り、崖地形をロープにつかまって登り上げると、平坦なチシマザサの台地に出て、すぐに抜けて原始ケ原湿原に入る。歩くと水がにじみだす踏み後を300m弱たどると、沼コース分岐に到着する。

〔⑨～⑩〕

富良野岳分岐から五反沼への沼コースをたどり、沼コース分岐までの15分足らずの接続のための短い行程である。木道が整備されていないので、足をぬらす覚悟がいる。

富良野岳分岐をでると100m弱で、分岐の地点からも見えていた白い四角柱が立っている。ここは、江戸末期の探検家松浦武四郎が、上川地方から十勝地方を探検した際に通った地点とされており、柱にも「松浦武四郎通過地点」と記されている。

原始ケ原の湿原の中には、小さなアカエゾマツなどがぼつぼつと点在しており、湿地と湿地の間にはササの生えた薄い林がある。

富良野岳分岐から沼コース分岐の間は、湿地がいくつかの林で仕切られているので、平坦だが見通しがきかない。湿地であるため、先行者の足跡は比較的良く残っている。点在する木に、赤色のテープでコース表示があるが、霧が発生したような時には踏み跡だけが頼りである。あっという間の感じで、沼コース分岐に到着する。

〔⑩～⑪〕

沼コース分岐を出発すると湿地、林が交互に現れ、この間に五の沢、布部川の沢を越える。木道や橋がないので、足元が濡れるのを覚悟する必要がある。

2.4kmほどの、ほとんど平坦な地形だが、足元に水がしみ出る湿地であるため、おおよそ1時間ほどかけて五反沼に到着する。

五反沼の直前には、幾筋かの水路を渡らなければならない。運が良ければ先行者が倒木などを渡した仮橋を使えるが、跳び渡りのできない幅のところもあるので、徒渉を覚悟しなければならない。

五反沼に到着したら、まず引き返す方向と道筋を、付近の目標物も合わせて目に焼き付けてもらいたい。その後ゆっくりと、周辺めぐりを楽しむ。着いた喜びで周辺をやたらと歩きまわった末、引き返そうとしたら迷ってしまったという例も多いので注意を要する。

〔⑨～④〕

富良野岳分岐は、ニングルの森登山口・富良野岳・五反沼方面コースの三叉点であるが、表示に沿って富良野岳の方向を目指す。晴れて視界が良ければ、コース途上では終始目的の富良野岳が眼前に確認できる。山腹の登坂路は、緑がはげて土石が露出しているので、遠目で確認できる。左手にそびえるのは前富良野1625mである。

分岐を出ると、富良野岳に向かってほぼまっすぐに湿地、林、ササやぶが交互する道を進む。木道はないので、たまにあるテープ表示を確認しながら、足を濡らすのを覚悟で忠実に踏み跡をたどる。この軽い登りが延々と1.9kmほど続いた後、傾斜が増して笹・灌木帯に入る。両側からかぶさりがあるので歩きにくい道を500m弱進めば、雨の時だけ水が流れる沢状のがれ場に出る。ここから傾斜が急にきつくなり、富良野岳頂上へ向けて、標高差約550mの一気の登りになる。

下の方では、地面が雨水で洗われているため、大石伝いに快調に登れるが、山頂近くになるにしたがって小石混じりの道筋になり、足元が滑りやすくなる。次第に息が上がり、小休止の回数も増えるが、その度に振り返り見下ろす景色に、よくぞ登ってきたと自分を激励したくなる。

山頂はまだかと登るうちに、不意に山頂稜線部に出て視界が広がる。この稜線を200m余り歩くと、山頂標のある1912mの富良野岳頂上に到着する。

[B~⑫]

吹上温泉登山口からの入口がちょっとわかりにくい。白銀荘前のキャンプ場の左手の照明塔横の丸太階段を上ると、入口が見える。約400mを森林の中を進み、これを抜けたところに小屋が1軒ある。この小屋は、昭和63年から平成元年にかけて十勝岳が噴火した際に、現地火山監視所として建てられたものであり、一般利用はできない。

このそばには、大正15年の十勝岳噴火で144名の死者・不明者を出した泥流災害を記念した「十勝岳爆発記念碑」(昭和4年10月7日建立)が立っている。

ここから進路方向に下っていくが、この低み一帯を500mほどの幅で、大正15年に泥流が流れ下ったのである。一帯に大きな木が一本もないのは、このためである。

この泥流の跡を進むと、不意に「岡本三男の碑」に出会う。昭和29年に遭難慰霊碑として建てられたものである。次いで比較的大きく侵食された富良野川の沢にぶつかる。岩伝いにこれを渡って川岸を登って少し進むと、小高い場所にハイマツに囲まれて、歩道中央をふさぐように碑石が立っている。これは、昭和4年に建てられた歌人九条武子の歌碑で、

「たまゆらのけむり おさめてしづかなる 山にかえれば 美るにしたいも」

と彫られている。大正15年噴火の沈静化を、慶び歌ったものである。

この先道なりで熔岩原を400mほど進むと、泥流センサーや火山観測施設の管理用道路に出る(旧泥流分岐)。下れば望岳台へ至り、100mほど登って左へ分ける荒れ道を進むと、数筋の侵食地形を横断して、十勝岳スキー場リフトに並行する登山道に、第2リフト中間位置当りでぶつかる。この周辺の道は、大雨の度に土砂が流出して、ここで説明したきたものを含め道筋が、度々微妙に変わるので注意が必要である。

九条武子の歌碑から旧泥流分岐の間は、荒々しい熔岩原に植生回復途中の様々な植物が庭園風の景観をつくりだしており、美しさはお勧めである。

[C~⑫]

望岳台登山口の入林届は、望岳台レストハウス内にあるため営業時間(8:00~17:00)外については記入できない。この場合、メモ紙にリーダーの住所、氏名、電話番号、メンバー数、使用車両番号、登山・下山日時(予定)を書いてレストハウスのドアに挟み込んでおけば、レストハウス側で届出簿に記入してくれる。

駐車場から少し登ると、登山コースその他周辺の概念図が大きな看板に示しており、次いで右に

吹上温泉白銀荘へ結ぶ道が分かれる。

コースは、十勝岳スキー場の第1、第2リフトに沿って延びている。周辺に木がなく、視界が広がるため平坦のように錯覚するが、石原のけっこうきつい登りが続く。観光バスなどで立ち寄りの人が、軽い気持ちで登り始めると、すぐに根を上げて引き返すのが落ちである。

ほとんどまっすぐな道を、第1リフトの降場と第2リフトの乗場を左手に見て更に登り、第2リフトの中間点付近にいくと、右手に吹上温泉、白銀荘方面への道がある泥流分岐に着く。この分岐は判りにくく、大雨の度に土砂が流出して、道筋が少しずつ変わっている場合もあるので注意が必要である。

〔12～13〕

泥流分岐を過ぎると、登りが更に急になる。石原なので、浮いた石に乗って足首を捻挫しないように注意したい。また、通行者が多いため、小石が摩耗して丸石になっているので、気を抜くと足元を取られる。

泥流分岐からは700mほどの道程で、左手にコースを曲げて、第2リフトの終点降場前の雲ノ平分岐に着く。分岐点右手には、十勝岳本峰方面のコースが分かれ、すぐ近くに十勝岳避難小屋も見える。左手には、硫黄沢川を越えて雲ノ平、美瑛富士方面の道が伸びている。

〔13～8〕

雲ノ平分岐を出ると、目前300mほどの十勝岳避難小屋跡地に到着する。ここには水場がなく、これからしばらく続く急な登りを控えて一息つく。

十勝岳避難小屋跡地を出るとすぐに、硫黄沢川の小さな流れを飛び石で渡り、急な岩混じりの登りに取り付く。

この沢には、6月下旬まで登山道と並行して北側沢地（硫黄沢）にかなり長く延びる雪渓が残るので、登り降りにこの雪渓ヘルートをとる者も多い。

正規ルートに話を戻すと、急な登りは1kmを超える長さがあり、中間に少し傾斜がゆるむ場所があるが、全体に急傾斜である。更に勾配を緩和するために九十九折に進むため、道程は2kmに近いものとなる。

数回の休息を取りながら登り上げると火山灰台地に出る。火山灰台地に出るとすぐに、左手に大きく窪んだ活動休止の摺鉢火口があり、右手には前十勝の62-II火口が盛んに噴煙を上げているのが見える。右手の噴煙方向から正面の十勝岳にかけての範囲も、大きな摺鉢地形になっているが、これは活動が休止しているグラウンド火口である。

1kmほど火山灰の上の歩きにくい砂礫の道をたどる。傾斜が少ないので、視界が悪い時には、ペイントマークや小石の道標を見失わないように注意が必要である。

グラウンド火口の外周を4分の1周ほど時計まわりにめぐると、山頂へ向けて急勾配となる地点に着く。

この急傾斜は二段になっており、下は火山灰と砂礫・粘土状の風化溶岩が深く積もる悪路で、3歩進んで1歩下がるほどの歩きにくさである。これを登りきると左の尾根筋に方向を変えて一旦傾斜がゆるくなるが、再び頂上へ向けて溶岩瓦礫の200m弱の急勾配になる。登りきったところが、連峰主峰の十勝岳、標高2077mの頂上である。

〔13～14〕

雲ノ平分岐標高1250mを出てすぐに硫黄沢川を飛び石で渡り、比較的きつい登りが少し続く。分岐から2.5kmほどをトラバースで山腹を巻くように、標高1420m地点の北向沢まで登り上げる。標高差はさほどないが、小さな緩急の登り、下りをつけながら高度を上げていくが、以外に疲労を招く。

北向沢は、函状に深く侵食されているので、沢越えの登り降りには設置されたロープを利用し、滑落しないように注意が必要である。（7月中旬までは沢が残雪に埋まり渡りやすいが、下が空洞で陥没することがあるので注意が必要）北向沢を越えると、ポンピ沢へ向けてトラバース状下りを500mほど進む。

ポンピ沢の水は飲用できるが、エキノコックス対策としては煮沸した方が安全である。ポンピ沢は飛び石で渡らなければならないが、水量の多い川なので、雨後の増水時には徒渉が必要なときもある。また、対岸の登山道は、沢に出た地点から100m弱下流側が変わるので、コースマークを見失わないように注意が必要である。

ポンピ沢を渡ると、次第に傾斜がきつくなり、この先では崖と表現できるほど急な道筋になる。岩や木の根株を頼って、30～40分かけて登りきると美瑛岳からの稜線に出る。この先の流水のない沢口が美瑛岳分岐である。美瑛富士分岐方面は沢向いへの直進で、美瑛岳方面は沢上方向に向かう。

〔14～15〕

美瑛岳分岐から沢沿いに登り、やがて美瑛岳からの尾根道に出る。初めのは、左右に丸く落ちる尾根道だが、次第に右手は崖状になり、同時に傾斜はきつく、がれ場から岩場へと変わっていく。美瑛岳分岐が標高1640mで、美瑛岳頂上の2052mまでの標高差400mを、1kmほどの行程で登り上げるのだから、この厳しさは想像がつくだろう。

横路にそれるが、地図を見ると、美瑛岳～美瑛岳稜線分岐～鋸岳方向を結ぶ稜線は、円弧を描いて南西方向に開いているのが判る。この円弧の内側は火口のようにすり鉢状に窪んでいる。

この窪みを埋めて外周の傾斜なりに盛り上げれば、円弧の中心に頂上を持つ、標高3000m近い山ができあがる。この幻の高峰が数万～数十万年前に山頂を吹き飛ばす大噴火を起こし、現在の地形ができあがったのである。

美瑛岳頂上で一息ついて、稜線岩場の北側のほとんど高低差のない400m弱を進むと、美瑛岳稜線分岐に到着する。

〔14～16〕

美瑛岳分岐から沢状地形を越えて瓦礫の登りを進むと、そこからはほとんど標高差のないトラバースを経て1時間弱で美瑛富士分岐に到着する。途中多くの沢状がれ場を越すが、このいずれも深いものではなく、平坦で比較的楽な行程である。

しかし、北側斜面であるため、沢状がれ場には7月上旬頃まで雪渓が残っており、雪渓渡りの方向を間違えると、道の取り付きを探して、余分な登り降りをしなければならない。

踏み跡があるときには忠実にこれを追い、先行者がいない場合には、前方を見通して道の取り付きうまく見つけなければならない。

雲ノ平からこの区間には、6月下旬から8月上旬まで、様々な高山植物の開花が楽しめる。この

区間は、北側斜面で雪渓が遅くまで残るため、花期が他の場所より1月前後も遅れるものもあって、思いがけない高山植物に出会える。

〔16～15〕

美瑛富士分岐は、コースが十字に交差している。このうちの南方向、コース表示に沿って、美瑛岳稜線分岐を目指して一気の登りになる。

美瑛富士分岐標高1716mから、美瑛岳稜線分岐2020mまで、300m余りの高度差を直線900m弱で登る強行軍である。大岩が混じるがれ場なので、岩につけられたペイントマークを見失わずにたどる。

美瑛岳稜線分岐から十勝岳を目指す場合にも、美瑛岳の山頂標を拝みたいというのが人情である。この時には、登り切りの間際に、美瑛岳方面を経由する道と、経由せずに十勝岳へ向かう道が分かれるので注意しながら進む。美瑛岳稜線分岐から美瑛岳までは、休憩を入れて往復30分程度である。視界が悪い場合は、登りについてはコースを外れても、稜線部にたどりつける。しかし、下りの時西側に外れた場合には美瑛岳分岐～美瑛富士分岐間に出て事なきを得るが、東側にそれると迷いかねない。迷ったときにはためらわずに稜線まで登り返すことを勧める。

〔15～8〕

美瑛岳稜線分岐を出てからしばらくは、東側斜面稜線直下の岩場を小さく上下しながら進む。西側に登れば稜線に出るが、オーバーハングで崖になっており、岩質も脆い所もあるので、稜線部には不用意に近づかないようにする。

ペイントマークのまばらな稜線東下の道を1.5kmほど進むと、左側ヘトラバースで斜面を下りコルに降りる。コルから小さな尾根に登り上げるが、このコースには表示が少ないので、踏み跡と地形を確認しながら進む必要がある。

この小尾根から、地質は一面が砂礫状の火山灰に変わり、コース表示は木杭に変わる。視界が良ければ正面に鋸岳の頂上が見上げられ、頂上から右手、北西方向にまさしく鋸の目状にギザギザな尾根が延びているの見える。ザクザクと足がもぐり込むゆるやかな登りを進むと、傾斜が増し始める地点から、進路を右手方向に曲げる。直進すると鋸岳直下の岩場にぶつかるため、迂回して稜線に出るためであるが、100m余りで再び鋸岳方向の右手に進路を変えてから、益々傾斜は急になる。傾斜がある上に、砂礫状の足元のため、とにかく辛い登りである。

鋸岳ピーク東側下を巻いて南側に延びる稜線に取り付いて進むと、十勝岳との間にこんもりと盛り上がる平ヶ岳が横たわる。コース杭をたどって平ヶ岳に登ると、周辺がなだらかにうねる火山灰台地地形に出る。コース杭の間隔が短くなっており、見失うことはないと思うが、視界が不良の時には十分な注意が必要である。

平な地形から十勝岳への急な登りに変わる付近に、左手にシートカチ林道へ向かう道が分かれるが、本案内では取り上げない。この分岐を過ぎて、急ながれ場の登りをつめると十勝岳山頂に立つ。

〔16～17〕

美瑛富士分岐標高1716mから美瑛富士頂上標高1888mまで、標高差172mをまさしく一気に登る。分岐から頂上までには、明確なコース表示がないので、ケルン状の50cm程度の高さの石積が所々にあって、これを目標にしている。がれ場のため踏み跡が残らず、

わずかに付いた跡も雨が降れば跡形もなくなる。

いたずらで積んだものではないので、決して崩さないように。また、崩れているものは補修し、間隔が開いている部分には追加で積み上げるよう協力いただきたい。

美瑛富士山頂からは、北東のコルに美瑛富士避難小屋が見下ろせる。この避難小屋への方向は、足場が悪いので事故を防止するため、また植生保護の面からも、頂上～小屋間の直登、直降は禁止されている。

〔⑩～⑫〕

美瑛富士分岐から美瑛富士山腹を巻いて、美瑛富士避難小屋分岐までの約800m、30分弱の単調な道である。7月下旬まで、東斜面に大きな雪渓があるので水を補給すると良い。中間点付近までは等高線に沿った高低のない道で、この先は美瑛富士と石垣山のコルへ向かって、トラバースのゆるい下りになる。

美瑛富士避難小屋分岐はこの下りの途中にあり、分岐左道の避難小屋までは約300mの緩い下りである。オプタテシケ山を目指す石垣山方向へは分岐を直進し、コルまで降りた後登り返す。この登り返しの始まり部分には、左に避難小屋跡までの別の分岐道がある。

〔D～⑫〕

美瑛富士登山口には、上川中部森林管理署が管理するカギのかかったゲートがあり、平成6年に舗装整備された涸沢(からさわ)林道を約1.9km歩く。ただし、森林管理署の許可を得ると、この約1.9kmに車を乗り入れることができ特別の事情が認められれば駐車もできるので、森林管理署に相談する。

将来的にはゲート開放、乗り入れ、駐車の方法も検討されているようだが、現在のところはこの不自由を我慢しなければならない。舗装林道の行止りになっている車回し兼駐車場の手前100mに、左に荒れた林業作業道路があるが、ここが事実上の登山口である。

コース途中所々に、登山口と美瑛富士避難小屋までの道程距離が表示されているが、この登山口の距離表示起点はここになっている。くねくねと曲がるこの作業道を1km弱進むと、右手急斜面を登る登山道の入口があり、表示看板も立っている。ここに入ると、森林の中に笹の刈り分けが延びており、比較的急な、登り一方の道が1.5kmほど続く。雨の時にはここを水が流れるので、雨上がりには滑りやすく歩きにくい。この先でトラバース状に傾斜が緩くなって、軽い登り下りの歩きやすい道が約1kmあり、岩場に入る。この岩場の周辺は、岩場の表面をコケと高山植物が覆い、アカエゾマツや灌木が人手をかけた庭園のように生い茂っている。この周辺を天然庭園と呼ぶゆえんが、現地に立つとよくわかる。この辺りから右手前方に美瑛富士が良く見えるようになり、円錐形の姿が富士の名を納得させる。この姿を終始右手前方に見ながら、緩急の登りが避難小屋まで延々と続く。

避難小屋手前約800mと400mの所には、7月下旬まで残る大きな雪渓があり、8月上旬まで水場に使われるので、給水すると良い。この最後の沢(雪渓)を過ぎて登り上げると、間もなく避難小屋が見えてくる。老朽化、荒廃がひどかった旧避難小屋は平成7年9月13日朝の強風により倒壊したが、平成8年8月11日プレハブ工法で新築再建され、現在は快適に利用できる。

避難小屋から美瑛富士避難小屋分岐までは、登り300m、10分弱で到着する。石垣山、ベベツ岳方面へは、この分岐と別の道がついており、約250m、10分弱で合流する。

美瑛富士避難小屋分岐を出ると、10分ほどで、左手から避難小屋からの道が合流する。石垣山は、名前に示すとおり石垣を積んだような岩山で、飛び石の要領で登る。山頂手前のこぶ山を過ぎ、石垣山山頂を経ずに東側をトラバースして、ベベツ岳との浅いコルに降りる。ここまでの道筋とベベツ岳を過ぎたコルへの下りまでは、10mと開けずにペイントマークがある。

石垣山～ベベツ岳コルから、すぐに約1850mのピークへ登るが、ベベツ岳頂上1860mとの間の約500mは、両側に切り立った稜線に沿って、軽い登り下りが続く。ベベツ岳は、頂上らしい頂上はなく、歩道横に半分壊れた頂上表示が置かれているのでわかる程度である。

頂上を過ぎると、ベベツ岳～オプタテシケ山コル1728mへ、岩場・がれ場の急な下りになる。

オプタテシケ山からは、西尾根と東尾根が延びており、西と東に肩状のピークがある。コルからこの西の肩へ向けて岩の重なる道を登るが、コルからオプタテシケ山頂上までは、ペイントマーク等コース表示がほとんどなくなるので、たまに現れる表示に注意して、慎重に進む必要がある。

肩に登ると前方に小さなピークが見え、これを越すと本峰へ向けて本格的な稜線の登りになる。稜線部には大岩の積み重なりが露出しており、明確なコース指示がない。稜線東側、西側あるいは稜線大岩の飛び渡りなど、めいめいのコースを取っているようだが、大岩を東側に迂回するものが歩きやすいようである。いずれにせよ、稜線両側は切り立って危険なので、焦らず慎重に歩を進めれば、間もなく2012mの頂上に立つ。

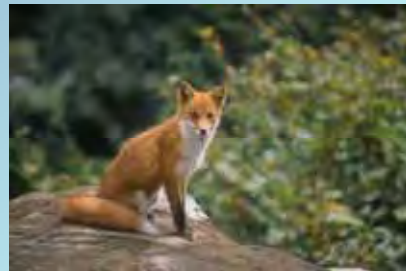
エキノコックス症とは

エキノコックス症とは、条虫（さなだ虫）の一種のエキノコックスの幼虫が、人に寄生することによって肝臓、まれに肺や脳などが侵される寄生虫病です。エキノコックスの成虫は、終宿主のキツネ、イヌなどの腸に寄生し卵は糞便とともに排出されます。卵は大変小さく、通常は肉眼で見ることはできず、ほこりとともに空中を飛ぶこともあります。

この卵が、中間宿主である人間・野ねずみ・豚などの口から、水、食物やほこりなどとともに体内に入ります。体内では、腸で子虫にふ化し血液に入って肝臓、肺、脳などに運ばれて幼虫まで成長します。

人間を含む中間宿主では、この幼虫が卵を生む成虫まで成長できないので、中間宿主の間では感染の心配はありません。終宿主のキツネ、イヌなどが、幼虫を持っている主に野ねずみを食べることによって、感染源が広がることになります。

注意しなければならないのは、感染源である終宿主から卵を受け取らないことです。最近、キタキツネが異常に増えており、観光客の与えるエサや人家の残飯を求めて人間との距離の接近や接触の機会が増えているため、感染が心配されます。卵の混入の恐れが高い沢水を生で飲んだり、キツネの体が触れた野菜、山菜、高山植物の実を生食することは、避けた方が懸命です。



エキノコックスの幼虫の成長は非常に遅いため、症状は感染後数年から十数年も経って出る潜伏期間の長いものです。この頃から、微熱や腹部の不快感、肝臓の肥大が現れ、更に症状が進行すると黄疸、腹水発生、肝不全を起こして死亡します。

現在は、症状が出ない潜伏期間中でも、血液抗体検査で感染の有無について判定でき、外科手術や薬物で治療できますので、感染の心配があるときには病院で検査を行ってください。

十勝岳連峰の高山植物

～登山者の癒しのシンボル～

植物名	高さ	特徴	花の形状\花期	5	6	7	8	9
エゾムラサキツツジ [ツツジ科]	1～2 m	株立ちする落葉低木。葉は表光沢楕円形で、枝先に集まって互生	径 2～3 cm、枝先に数個、赤紫					
ムラサキヤシオ [ツツジ科]	1～2 m	落葉灌木で枝は細く腺毛あり。葉は倒卵形、硬膜質、裏淡緑で枝頂に輪生状	径 3～4 cm、頂生 赤紫					
オオバスノキ [ツツジ科]	1m	小枝をよく出す落葉低木。葉は楕円形で 長さ 3～8 cm、先が尖る	鐘形 6～7 mm、前年枝先に 2～4 個					
マイヅルソウ [ユリ科]	5～20 cm	多年草、細くはう根茎で群生、3 角卵状心形、2～3 枚、3～10 cm、光沢	2～3 mm 小花 20 前後の総状、白					
ガンコウラン [ガンコウラン科]	10～20 cm	常緑小低木、葉は硬い線形 5 mm で枝に密生、雌雄異株、岩礫地	枝先の葉脇につき、赤だが目立たない					
ショウジョウバカマ [ユリ科]	10～20 cm	常緑多年草、葉は細長へら形根本に多数 中心から花茎、花は茎頂に 5～6 固まる	10～15 mm 6 弁淡紅～淡紫					
イワツツジ [ツツジ科]	5～6 cm	落葉小低木、葉は互生、3～5 mm 倒卵形、葉裏に毛、縁に細鋸歯	壺状鐘形、5～6 mm、先 5 裂、淡紅					
コイワカガミ [イワウメ科]	5～10 cm	イワカガミの矮性変種、葉は円形で厚く光沢、高山の岩場	細長いロート状で 5 分先端細裂桃色					
イワウメ [イワウメ科]	2～3 cm	常緑小低木、地上をはい群生、葉は 1 cm、厚く表面光沢、岩礫地や雪渓縁	茎頂に 15 mm 梅花類似、淡黄色 1 個					
キバナシャクナゲ [ツツジ科]	20～40 cm	常緑低木、幹は横にはって枝分かれ葉は長楕円形で先は丸く、やや硬い	径 4 cm、枝の先に 5～6 個、黄色					
ゴゼンタチバナ [ミズキ科]	10～20 cm	常緑多年草、地下茎で群生、葉は対生 4～5 対、15～30 mm 尖る長楕円形	4 枚の苞葉が花弁に似る、小花多数					
マルバシモツケ [バラ科]	30 cm～ 1m	分枝の多い低木、葉は倒卵形、上半に鋸歯、裏は薄赤、荒原や岩礫地	5 mm の 5 弁小白花を枝先に密生					
クロウスゴ [ツツジ科]	10 cm～ 1m	変化が多い落葉低木、葉は 2～4 cm 楕円形、若枝が角ばる、加マノネに類似	壺形、若枝わきに 1 個、クリーム色					
クロマメノキ [ツツジ科]	5～10 cm	落葉小低木、葉は倒卵形で裏は淡白色、枝は丸く加マノネと異なる	壺形、若枝わき 2～3 個、帯紅白色					
エゾノマルバシモツケ [バラ科]	10～30 cm	落葉小低木、葉は卵形、周辺上半に鋸歯裏は淡赤	枝先に径 5 mm 小白花が多数密に付く					
メアカンキンバイ [バラ科]	3～10 cm	多年草、葉は 10 mm 程度 3 小葉で、先が 3 裂、広楔形	茎先に 1～5 個径 15 mm、橙黄色					
ウラジロナナカマド [バラ科]	1～3 m	落葉低木、株立分枝、葉は羽状奇数複葉 9～13 枚、超楕円、上半鋸歯、紅葉	枝先径 1 cm の小白花多数、実は赤熟					
ハクサンチドリ [ラン科]	15～30 cm	多年草、葉は 3～6 枚で互生披針形、長さ 7～15 cm、幅 7～30 mm	唇弁花を穂状に多数、15 mm、紅紫					
イワヒゲ [ツツジ科]	5 cm	常緑小低木、4 角の紐状茎に鱗状の葉を 4 列に密生、岩礫地や岩裂	小鐘状で葉腋につく、白～帯紅色					
コケモモ [ツツジ科]	5～15 cm	常緑小低木、葉は楕円形で 10 mm、厚く光沢、実は秋に赤熟	筒状鐘形 8 mm、枝先に数個、淡紅色					
シラタマノキ [ツツジ科]	10～20 cm	常緑小低木、枝分れ多い、葉は楕円形で厚く表に網目、裏は薄赤、実・花は白色	壺形、総状枝先 1～5 個下向 5 浅裂					
エゾ(ノ)ツガザクラ [ツツジ科]	20～30 cm	常緑小低木、多数枝分れ、葉は線形 7～12 cm で密に互生、岩礫地	枝先に横向壺形数個 10 mm、紅紫					

植物名	高さ	特徴	花の形状\花期	5	6	7	8	9
チングルマ [バラ科]	10～15 cm	小低木、大群落、葉は奇数羽状複葉で3～5 cm、小葉は8 mm長卵形、細鋸歯	径2 cm頂部に1個5弁黄、花後白毛					
エゾコザクラ [サクラソウ科]	5～10 cm	多年草、葉は多肉質、楔形、上半に鋸歯、高山の湿った草原	径2 cm、茎頂に2～数個、濃桃色					
ウコンウツギ [スイカズラ科]	1～2 m	落葉低木、葉は楕円形で、先が鋭く尖る、葉脈がハッキリし、やや硬い	先が5裂でラッパ状、3～4 cm黄色					
イソツツジ [ツツジ科]	50 cm～ 1 m	常緑低木、株立枝分かれ、葉は尖る長楕円形25～60 mm、火山灰地	径15 mm、枝先にてまり状群花、白					
コメバツガザクラ [ツツジ科]	5～15 cm	常緑小低木、花や葉はコケモモに類似、コケモモより花の壺形が強い、がく紅	5～10 mm、枝先に3個、クリーム					
ミネズオウ [ツツジ科]	3～5 cm	常緑小低木、葉は6～12 cm長楕円、密につき革質光沢、岩礫地	枝先鐘状4～5 cm中裂数個上向淡紅					
ジムカデ [ツツジ科]	5 cm	常緑小低木、地面をはい枝分れ、葉は針状3 mm枝に密生、花がくは紅	鐘形5 mm、枝先下向きに1個、白					
アオノツガザクラ [ツツジ科]	10～30 cm	常緑小低木、分枝し地表をはって成長、葉は細く茎に互生密生	黄白8 mmつぼ花が枝先に数個下向					
コマクサ [ケシ科]	5～10 cm	多年草、葉は灰青色、先が細かく裂ける根は太いヒゲ状で深い	茎先に3～5個、赤色イカリ状					
イワブクロ～タルマイソウ [ゴマノハグサ科]	10～20 cm	多年草、根茎が伸び株立、葉は尖楕円形厚み有、4～7 cm縁に毛、花は茎に横向	筒状鐘形、4～7 cm縁に毛、薄紫					
エゾヒメクワガタ [ゴマノハグサ科]	10～20 cm	多年草、茎は直立株立で白い軟毛、葉は20 mm広卵形対生5～8対、弱鋸歯	4弁、10 mm、茎頂に数個、淡青紫					
ミヤマリンドウ [リンドウ科]	5～10 cm	葉は対生、卵状長楕円形、長さ5～12 mmで厚みと光沢あり	筒状漏斗形青紫1～4個、20 mm					
ハクサンイチゲ [キンポウゲ科]	15～30 cm	多年草、葉は円心形3全裂、更に細裂、花茎は1～4個	白色花弁状がく片5～7、径2 cm					
イワギキョウ [キキョウ科]	5～10 cm	多年草、根茎を延ばし途中に株、葉は8～10 mmへら形多数、荒い鋸歯	茎頂又は葉わき鐘形25 mm、5裂紫					
ウサギギク [キク科]	20～40 cm	多年草、単一花茎で白い柔毛、花茎の下部に3～4対の卵状披針形葉	茎頂に径4～5 cmの黄色菊状花					
ダイセツトリカブト [キンポウゲ科]	30～70 cm	多年草、葉は5～7に深裂し、裂片は更に切れ込む	茎先にかぶと形、4 cm程度、紫					
トカチフウロ [フウロソウ科]	40～60 cm	多年草、葉は掌状に5～7裂、更に細裂する	茎頂に径2～3 cm10個程度、5弁					
シラネニニンジン [セリ科]	10～30 cm	多年草、羽状複葉で小葉は更に細裂、高山の草原	茎先端散形に20～30個、白					
ヨツバシオガマ [ゴマノハグサ科]	15～40 cm	多年草、普通葉は4枚が輪生2～5段、羽状全裂披針形、高山の草原	4個輪生花穂、花唇は嘴状に突起					
コガネギク [キク科]	20～30 cm	多年草、葉は楕円形鋸歯、先が尖る、高山の草原、砂礫地	茎上部に多数の頭花、黄色					
エゾオヤマリンドウ [リンドウ科]	20～40 cm	多年草、茎は直立、葉は披針形、上部ほど小さい、高山草原や火山灰地	茎頂のみ2～5個、35～45 mm青紫					

※ 上表の高山植物のほかに、富良野市の原始ヶ原では、ミズバショウ（6～7月：サトイモ科）、ヒメシャクナゲ（6～7月：ツツジ科）、シロバナトキソウ（6～7月：ラン科）、ウズラバハクサンチドリ（7～8月：ラン科）、ワタスゲ（6～7月：カヤツリグサ科）、モウセンゴケ（6～8月：モウセンゴケ科）、タチギボウシ（7～8月：ユリ科）などの湿原生植物が見られる。